新入生にすすめる本

2016
年度

先生・先輩方による
読書のススメ

日本赤十字九州国際看護大学

新入生のみなさん
ご入学おめでとうございます

本学では、平成 18 年度から、毎年の入学式で『学長が新入生に薦める 100 冊の本』を配布してきました。

「医療に携わる人として深い教養と知性を身につけてほしい」という喜多名誉学長の願いにより始まったこの試みは、平成 25 年度から執筆者を全教員に広げ、現在も続いています。

そしてこの度、新入生の皆さんに本にもっと親しんでもらえるよう、在学生がすすめる本も加えたブックガイドが誕生しました。先生方や在校生が、新入生の皆さんに向けて「学生時代にぜひ読んでほしい！」という本を選んでいます。やる気を奮い立たせてくれる本、知的な刺激を与えてくれる本など、さまざまなジャンルの本が出揃いました。

大学での学び初めにぜひご覧ください。

図書館長 リベラルアーツ・専門基礎 領域
吉永 宗義 教授のおすすめ本

『パラサイト・イヴ』
瀬名秀明著,
新潮社, 2007.
(2F 開架 913.6/S)

3 年前にリン・マルグリスが書いた『ミクロコスモス』を紹介した。微小生命（細菌）の出現と大発展、そしてこの地球上の生命と地球そのものが「共生」というキーワードによって解き明かされていく。生命体としての地球の 46 億年の壮大な物語を綴ったものである。しかし、少々難しいらしくなかなか手に取ってもらえない。そこで、今回『パラサイト・イヴ』を紹介することにした。これは、第 2 回日本ホラー小説として絶賛された大賞受賞作である。ある女性の交通事故から物語は始まるのだが、その後、脳死、臓器移植などの問題を経て、ミトコンドリアの反乱というストーリーが展開される。そして気付く。『ミクロコスモス』を読んでいたからこそ、この本が本当に面白い小説だったことがわかったと。

2015年
首都決戦
準チャンプ

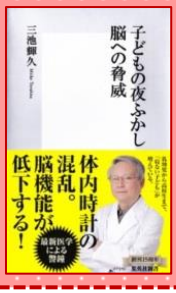
2年生
今成 祥さんのおすすめ本

現在も世界のどこかで紛争が起きています。テロや紛争が頻発する今の世の中、平和は訪れるのでしょうか。そもそも平和とは何なのでしょうか。紛争が終結すればそれはすなわち平和が訪れると言えるのでしょうか。戦うことを仕事としていた兵士たちはどうなるのでしょうか。「DDR」――皆さんはこの言葉を知っていますか？DDRとは兵士の「武装解除（Disarmament）」「動員解除（Demobilization）」「社会復帰（Reintegration）」を指します。世界的にもあまり専門家がいなかったこのDDRに自らニーズを見出し、取り組み始めた一人の若き日本人女性がいます。それがこの本の著者です。

本学には、海外で働きたいという目標を持って入学された方も多いと思います。この本はきっと、皆さんが目標に向かって頑張るための良い刺激となるはずです。

『職業は武装解除』
瀬谷ルミ子著，
朝日新聞出版，2011.

成育看護 領域
大重 育美 教授のおすすめ本



『子どもの夜ふかし
脳への脅威』
三池輝久著，
集英社，2014.
（2F 開架 493.937/M）

4月の早い段階で新入生のみなさんにお勧めしたい本です。

最近の子どもたちは、短眠傾向といわれています。いわゆる遅寝早起きです。そして夜ふかしの大人たちのもと、乳幼児の睡眠事情も夜ふかしの脅威に晒されています。「夜ふかし」→「睡眠不足」→「疲労感」→「朝、起きられない」→「授業中、居眠り」という負のスパイラルについて教えてくれます。まさに転換期のみなさんにとって良質な睡眠のヒントをくれる一冊といえます。

ヘルスプロモーション・在宅看護 領域
岡村 純 教授のおすすめ本

『微生物の狩人』
ポール・ド・クライフ著,
秋元寿恵夫訳,
岩波書店, 1980.
(2F 開架 491.7/D/1-2)

クライフの『微生物の狩人（上下）』（秋元寿恵夫訳、岩波文庫、1980）は、筆者が小学生の時代に愛読した偕成社版の完訳本である。今、思い起こしてみると、大学受験に際して医学科ではなくて医学部保健学科を目指したのも、大学時代から農村をフィールドとしてコミュニティの健康問題を追究するサークル活動を続けてきたのも、この本の影響と言えるかも知れません。

この本は単なる偉人礼賛の医学研究者列伝ではない。研究者の生きた時代と時代が描かれている。とくに、細菌学の黎明期における、伝染病の原因をめぐるパスツールとコッホの学問的戦いは、手に汗握る臨場感で描かれている。

エボラ出血熱やジカ熱、マラリヤやデング熱、など新興・再興感染症が重要な健康問題となる今日において、看護職をめざす者の教養の書として、「ジェンナーすら知らない看護師」と呼ばれないように、ぜひ読んでほしい。

2013年
首都決戦
出場

4年生
鹿子島 惇さんのおすすめ本

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。今回、私は皆さんに、森博嗣の『喜嶋先生の静かな世界』を紹介します。

この本は、とある大学の工学部を舞台にした小説です。ストーリー全体を通じて、大学で学問を学ぶとはどういうことなのか、研究をするとはどういうことなのかを考えさせられる一冊です。私は、初めてこの本を読んだときに、今までの大学生活に対する後悔と残された学生生活の中で私自身何をなすべきなのかと考えさせられたことを覚えています。大学での4年間は、あっという間に過ぎていきます。その時間を無駄にしないために、4年間で自分は何をしたいのかを明確にして過ごしていくことの重要さをこの本を通じて学ぶことが出来ました。皆さんもぜひ、ご覧下さい。

『喜嶋先生の静かな世界』
森博嗣著,
講談社, 2010.
(2F 開架 913.6/M)

２年生
吉良 洋紀さんのおすすめ本

私が紹介するのは、木内一裕氏の『キッド』という本です。

この本のあらすじは、少女を助けた青年が、それがきっかけで命がけの事件に巻き込まれ、幾度もピンチに陥りながらも機転を利かせて困難を乗り越えていくというものです。ありふれたストーリーだと思うかもしれませんが、ついつい引き込まれてしまいます。理由は、なんといってもその疾走感。二時間ドラマや映画のように、休憩を挟まなくてもスラスラ読めてしまいます。また、著者の木内氏は『BE-BOP-HIGHSCHOOL』などの有名な作品も書いている漫画家です。そんな著者が、小説というスタイルで表現したこの作品、一度読んでみてはいかがでしょうか？

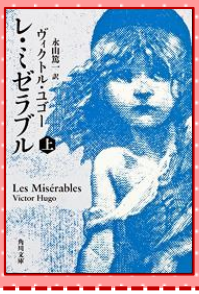
『キッド』
木内一裕著,
講談社, 2012.
(2F 開架 913.6/K)

ヘルスプロモーション・在宅看護 領域
小林 裕美 教授のおすすめ本

『科学者が人間であること』
中村桂子著,
岩波書店, 2013.
(1F 新書 080/N)

生命科学を専門とする著者が、東日本大震災を機に、科学とは、科学者とは何かについて、そして「生きていること」に向き合って「どう生きるか」について問い直している。科学論や科学史に関する他の書籍のような難解さがなく、身近な話題から科学の課題を説いている。しかし、看護は、健康の側面から「生活していること」に焦点を当てて探究し、価値を見出して、これも科学であると考えてきた。従って、あまりにも当たり前のことで、立ち位置が逆だとも感じるが、看護にとっての追い風だと捉えておきたい。

リベラルアーツ・専門基礎 領域
鈴木 清史 教授のおすすめ本



『レ・ミゼラブル』
ヴィクトル・ユゴー著,
永山篤一訳,
角川書店, 2012.
(喜多文庫 953.6/H/1～3)
※所蔵は集英社世界文学全集版

「レ・ミゼラブル」というとミュージカルの作品として有名であるが、原作はヴィクトル・ユゴーによる 19 世紀フランスを代表するロマン主義の大河小説（『レ・ミゼラブル』）である。邦訳は複数の出版社による文庫版で入手可能であるが、どれも 2000 ページを超えている。その量に圧倒されるが、原著者による綿密な時代考証と主要な登場人物であるジャン・バルジャン、コゼット、マリウスそしてまたエポニーヌらをめぐる丁寧な描写が読み手を魅了している。そして最近改めて読み直してみて感じたのは、究極状況に置かれた人間が経験するジレンマと、その解決策を模索する辛苦がモチーフになっていることであった。それらは、現代に生きる私たちにもあてはまることばかりである。1 世紀半を超えて、文字でも舞台でも世界中で支持されている理由を改めて認識できた気がした。学生時代に読んでみてはいかがでしょうか？

メンタルヘルス 領域
髙橋 清美 教授のおすすめ本

『がんを生きる』
佐々木常雄著,
講談社, 2009.

本書は、がん告知後の患者さんと医療者がどう向き合うのか、さまざまなエピソードを交えながら読み手に問いかけている。

「私が死んだあとの家事をたくさん教えなきゃ、寝たきりの私でも役に立つことがある・・」、「小さな子を失った親には子に会える天国、あの世が必要」、「朝になってからのほうが安心して眠れる、チュンチュンという鳥の声と看護師さんの足音が一番の睡眠薬です」、これらの言葉の深い意味を、皆さんはこの大学でこれから学んでくださるのだと期待している。

死を告げられると、誰しも恐怖や不安を抱えるのだと思う。第 8 章では、短い命の宣告で心がつらい状況にある人に対し、奈落から這い上がる具体的方法が記載されている。それは、気持ちの整理のために書くこと、泣ける・話せる相手を見つけること、と記されている。これから、看護学を学ぶ新入生にぜひ薦めたい一冊である。

２年生
高良 空虹さんのおすすめ本

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。
新しい学校、新しい友達、新しい環境に
戸惑うこともあると思いますが、自分らしく
毎日を楽しんでください。
大学生だからこそ、チャレンジできる
ことがたくさんあります！

『行くぞ!ロシナンテス：
日本発国際医療 NGO の挑戦』
川原尚行著,
山川出版社, 2015.
(2F 開架 498.024/K)

大学名に国際とつく本学に入学した皆さんの中には、国際協力や国際看護など、世界に目を向けている人もいるかと思います。

本書は、東北での復興支援や、途上国スーダンで医療を提供しているＮＰＯ法人ロシナンテスの代表者である、福岡県出身の川原尚行先生が執筆した本です。世界に目を向け、実際に国内外で活躍をしている川原先生の体験を記した本書から、「医」を通して世界と繋がることができ、自らも学ぶことが多くあることを知りました。

私も現地に行って、そこでしか感じられないこと、見られないものを体験してみたい。そのような想いに駆られる本でした。

この本を読んで、日本はもちろんのこと、海外にも医療・看護という視点で興味をもつきっかけになればと思います。

リベラルアーツ・専門基礎 領域
因 京子 教授のおすすめ本

『魔女の１ダース：
正義と常識に冷や水を
浴びせる 13 章』
米原万里著,
新潮社, 2000.
(2F 開架 914.6/Y)

本学の学生諸子には国際活動に関心を抱く人が少なくないだろう。少なくとも、面接で志望動機を訊かれてそう答えた人は多いはずだ。そんなことは言わなかったと胸を張り（？）、外国と関わるつもりなどないと傲語する人でも、交通や通信手段の発達が加速化する今日、異文化と無縁に一生を過ごすことは難しい。異文化を理解する力は、21 世紀を生きる者にとって必須要件である。

本書を読めば、「異文化と向かい合う」ということがどのようなことなのか、相当ぼんやりした人にもうっすらとわかるだろう。そして、それが自分の人生を豊かにするだろうという予感的確信を得るだろう。本書の著者は、類まれな言語の使い手であり、対象への透徹した批判力と深い愛情を持つ優れた書き手であったが、早世したため著作は多くない。本書を皮切りに全てを読むことをお勧めする。読まずに死ぬのは惜しい本ばかりである。

老年・慢性看護 領域
中村 光江 教授のおすすめ本

『わたしを離さないで』
カズオ・イシグロ著,
土屋政雄訳,
早川書房, 2006.
(喜多文庫 933.7/I)

カズオ・イシグロは長崎生まれの日系イギリス人作家である。国内ではあまり知られていないかもしれないが、国際的評価は高く、村上春樹などとともに将来のノーベル文学賞候補とも言われている。

はじめは、ありきたりの日常生活が淡々と描かれているように思えるが、抑えた表現の端々から登場人物の背景がわかっていくにつれ、種としての人間に対する様々な疑問が、息詰まるような冷たい罪悪感とともに湧き上がってくる。これ以上の詳しい紹介は読む醍醐味を損なうことになるので控えたい。現代に生きる誰にとっても一読の価値があると思うが、看護を学ぶ皆さんにはぜひ読んでいただきたい。

ヘルスプロモーション・在宅看護 領域
乗越 千枝 教授のおすすめ本

『ケアの本質：
生きることの意味』
ミルトン・メイヤロフ著,
田村真, 向野宣之訳,
ゆみる出版, 1987.
(2F 開架 114/M)

表紙を開くと大きな文字で読みやすいのかと思いきや、理解するのはなかなか難しいかもしれません。読みにくいのは翻訳本であるという理由もありますが、訳者がその言葉や文章の本当の意味を読み手に正確に伝えようとする姿勢からだと思います(原題は On caring です)。巻末に多くのページを割いている付録と突き合わせながら読まれるとよいでしょう。最後まで読みすすめると副題の「生きることの意味」が腑に落ちます。今後、様々な看護場面で行き詰ることや「自分がなぜここにいるか」と自問自答することがあるかと思いますが、この本を開くとそのたびに違うメッセージを受け取ることができます。安価ですので手元においてスルメのように味わってほしい書です。

2015年
北部九州地区
決戦出場

２年生
花田 聖さんのおすすめ本

みなさんは、普段、死について考えているでしょうか？きっと多くの方が考えていないと思います。なぜなら、人は、自分が死に直結する病に侵されるなど、自分自身が死に向かう当事者になって、初めて死について考えるからです。この本は、安楽死や尊厳死、臓器移植などの実際に起こった医療事件の当事者の観点から死について書かれたドキュメンタリーです。患者とその家族や医師、どちらか一方の意見ではなく、双方の見解が示されているので、これらの医療問題を自分なりに考えるきっかけになると思います。

私がこの本の中で最も印象的だったのは、余命宣告を受けた 26 歳の女性が臓器移植を断る選択をした話です。移植を断るということは死を意味します。それなのに、なぜその若さで彼女は自分の命を永らえる選択をしなかったのか。臓器提供を受ける側としての彼女の考えにとても感動しました。安楽死や臓器移植などの医療の倫理的問題は、１年生のうちから様々な授業で考える機会も多いので、参考にもなると思います。ぜひ読んでみて下さい。

『いのちの器：
臓器は誰のものか』
高山文彦著，
角川書店，2003.
（2F 開架 916/T）

老年・慢性看護 領域
姫野 稔子 教授のおすすめ本

『壊れた脳生存する知』
山田規畝子著，
講談社，2004.
（2F 開架 916/Y）

本書は、脳血管疾患の次第に重篤になっていく症状を医師である患者自身が綴った貴重な記録です。脳出血を繰り返すたびに、高次脳機能障害や空間性認知障害、記憶障害、注意力低下が進んでいきます。我が身に生じる不可思議な現象に困惑・混乱しながら対処していく様子を、医学的分析と共に的確に記述しています。悲観に走らず、過度の滑稽という自己韜晦にも陥らない淡々とした描写は、読む者をありありと事実に対峙せしめます。「突き出しているはずの便器が背景と同じように平面に見えたりする」等という想像を絶する現象を体感的に描写した記述は、他の専門書にも見ることができない一冊となっています。

２年生
藤本 佳奈さんのおすすめ本

『面倒だから、しよう』
渡辺和子著，
幻冬舎，2013.
（2F 開架 913.6/K）

「よりよく生きること、人間らしく生きること。」現実には、自分中心に考え、自分の立場を守ろうとする人が多いなか、この言葉どおりの生き方を成していくのは難しいでしょう。でも、自分には直接関係がない面倒なことでも、誰かのためになることがあります。この本は、その面倒なことをやるかやらないか迷ったときに、自分の損得を超えてよりよい選択をし、安易に楽な方へと流されず自分と闘うこと、転んでも立ちあがって、毎日をていねいに生きていくことの大切さを知ることのできる本です。

毎日同じことの繰り返しでも、１回１回が仕始めで仕納め。同じことは２度とない。だから、今という時間を大切にしていきたい。

この本を読んで、化粧品や洋服で着飾った外面のきれいさだけでなく、自己と向き合い闘うことで得る心の輝き、内面の美しさを手に入れてみませんか？

看護の基盤 領域
本田 多美枝 教授のおすすめ本

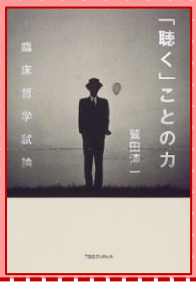
『協力と罰の生物学』
大槻久著，
岩波書店，2014.

最近、北大の研究者が、組織の長期的存続には一見無駄な働かないアリが必要という研究結果を発表している。この情報を得て、以前読んだこの本を思い出し読み返してみた。

一般的に進化は突然変異という偶然を原動力にしているといわれている。それに加えてヒト以外の植物界、動物界では、共生（「協力」と表現されている）という形とその反対の行動をうまく組み合わせながら、環境に対する脆さを持ちつつも多様に変化している。

著者は生物学者ではあるが、社会学者としての視点を持ってこれらを彷彿させる多くの面白い例を示している。特に反対の行動については、生物界のダークサイドとして「罰」と表現していることは興味深い。ヒトは自らの意思で考え、決定する能力を獲得した動物であり、社会貢献や法律等、「協力」や「罰」の仕組みを作りあげてきた。一方、ヒト以外の動物が起こす行動が、ヒトが実践している行動と類似していることは大変興味深く、思わず生物への憧憬を持ってしまう１冊である。

２年生
政村 千遥さんのおすすめ本



『「聴く」ことの力：
臨床哲学試論』
鷲田清一著，
TBS ブリタニカ，1999.
（2F 開架 104/W）

本書は、哲学者の鷲田清一氏によって著されたもので、「聴く」という行為から臨床哲学の可能性について考えを深め、社会に繋げる新しい試みを示した本となっています。特に、患者への対応における医療関係者の「聴く」力の大切さが述べられていて、カウンセリングやコミュニケーション力など、看護にも必要なことやなるほどと納得することがたくさん出てきます。1 年生のときに異なる科目で学んでいた内容の意味が、本書を読むことで繋がったこともありました。内容的には少し難しい部分もありますが、これからたくさんの知識を得たときに本書を読みなおすと、また違う視点で読むことができるのではと楽しみに思っています。皆さんも、看護を勉強し始める前に、一度読んでみませんか？

リベラルアーツ・専門基礎 領域
柳井 圭子 教授のおすすめ本

『背信の科学者たち：
論文捏造はなぜ
繰り返されるのか?』
ウイリアム・ブロード，
ニコラス・ウェイド著，
牧野賢治訳，
講談社，2014.

本書は、1983 年にアメリカで出版された「Betrayers of the Truth :Fraud and Deceit in the Halls of Science」の訳本です。2014 年に、訳者による日本での状況解説が追補され、新しく出版されました。ここに意味があります。日本でも、科学者による不正問題が次々と発覚しています。真実を追究する科学者による背信行為。どうしてこのようなことが繰り返されるのでしょうか。本書は、著明な科学者の事例を示しながらこのことを論証してくれます。皆さんが学んできた科学者（ガリレオ、ニュートン、メンデル他）にもみられる不正。偉大な科学者も人なのだと改めて感じさせられますが、科学者はそれではいけないのです。ここに示されている深刻な問題を捉えて下さい。科学をみる目を一転させてくれます。看護学（Nursing Science）を学ぶ皆さんにとって、本書は必読ともいえるでしょう。

クリティカルケア・災害看護 領域
山勢 善江 教授のおすすめ本

『蒼穹の昴』
浅田次郎著,
講談社, 2004.
(2F 開架　913.6/A/1～4)

19 世紀末西太后が政権を掌握していた清代の中国を舞台とした歴史長編小説です。貧しい家族のために自ら浄身し、宦官となって西太后の下に出仕する李春雲、その義兄で同郷の梁文秀は科挙を首席で合格し、官僚制度を上る。彼らと、この時代に実在した人物たちが織り成す壮大な物語です。宦官や科挙など、歴史の教科書で覚えた言葉が現実のこととして描かれ圧倒されそうになります。この小説を読み終わって気づくのは、小さな人間達はうごめき小さな流れや歴史を作る。その小さな流れが 大きな流れを変える力にもなりうる。「人間は天命に負けず、世の中を動かすのは宿命ではなく、人の生き様なのだ」ということです。

２年生
山本 祥子さんのおすすめ本

今回私が紹介する本は『最強のコミュニケーション ツッコミ術』です。この本を紹介するのは、看護学を学びにきた皆さんにお笑い芸人になってほしいからではありません。この本には、大学生にも役に立つことがたくさん書かれています。ツッコミとは違和感を拾うことです。さらに、ツッコミ脳になると、他人と違う着眼点を持つことができます。この本では、ツッコミ脳になる方法がわかりやすく説明してあります。新書なのでページ数が多いわけでもなく、お笑い芸人を例にしているところもあるので飽きずにすぐ読むことができると思います。ぜひ、手に取って読んでみてください。

『最強のコミュニケーション
ツッコミ術』
村瀬健著,
祥伝社, 2015.
(2F 開架 104/W)

2014年
北部九州地区
決戦出場

３年生
吉田　恵さんのおすすめ本

『東ティモールの現場から：子どもと平和構築』
久木田純著，
木楽舎，2012.

この本には、ユニセフの現地代表としてインドネシアから独立した東ティモールを支援していた方の現地での経験が書かれています。実際に私も大学１年生の夏に NGO 団体が企画する東ティモールへのスタディーツアーに参加し、現地での活動について学びました。

皆さんも１年生の夏休みなどにスタディーツアーへ参加する前にこの本を読み、少しでも国際協力の現場の楽しさや、組織で動くということの難しさを知り、実際の現場を身近に感じていただけたらと思います。

浦田前学長からも
紹介していただきました！

前学長
浦田　喜久子　先生のおすすめ本

『武士道』新渡戸稲造著，岩波書店，1938.（2F 開架 156/N）

本書は、1889 年（明治 32 年）アメリカ滞在中の新渡戸稲造が、日本の道徳価値について海外の人々に知らせるために著したものである。日本でも翌年翻訳が出版され、その後、英語以外の多くの言語にも翻訳された。約 700 年にも亘る、日本の長い封建制度の時代に培われた武士道が、近代の日本人全般の日常に生きる信条となって実践されていることを、ヨーロッパの歴史、宗教、文学から類例を引いて説明している。明治 10 年の当時、日本国民が、赤十字思想をたやすく受け入れた理由について、第五章「仁、惻隠の心」で説明しているのも興味深い。やや難解なところもあるかもしれないが、今も日本人の中に生きている道徳観を改めて意識すべく、是非挑戦していただきたい。

知っていますか？

今回本を紹介してくれた先輩方は、昨年度の学内ビブリオバトルに参加してくれたみなさんです。

ビブリオバトルとは、本の紹介コミュニケーションゲームです。「人を通して本を知る、本を通して人を知る」をキャッチコピーに、知らない本や人に出会い、世界が広がる新たな知的ゲームとして、大学や図書館だけでなく、小・中学校から地域のコミュニティまで幅広く行われています。

内容は、本の紹介を聞いて、その中で一番読みたくなった本を選び、もっとも票を集めた本がチャンプ本になるという、とてもシンプルなものです。

高校・大学を対象にした全国大会も開かれており、図書館ではその予選も兼ねて、年 2 回程度開催しています。昨年度は、予選と地区決戦を勝ち上がった本学 2 年生（当時）の今成さんが全国大会に出場し、見事準チャンプに選ばれました！次のページにインタビューが載っていますので、ご覧ください。

みなさんもぜひ参加してみませんか？

ビブリオバトル

全国大学ビブリオバトル2015首都決戦で準チャンプに選ばれた本学２年生の今成さんにインタビューしました！

首都決戦の決勝戦の様子

――ビブリオバトルは知っていましたか？
はい。大学に入ってから、図書館でやっているのを見ていたので知っていました。高校生の時にもニュースで見たことがあります。
――実際に紹介していかがでしたか？
率直に楽しかったです。本格的なビブリオバトルは初めてだったので、初めは緊張したんですが、プレゼンテーションスキルズの授業で人前で話すことを経験していたので、回を重ねていくうちにだんだん楽しくなってきました。最後の方は「自分の発表を聞いてほしい！」という気持ちで、かなりノってましたね（笑）。学内の予選会では本にメモを貼ってたんですけど、地区決戦以降はそれをやめて、ポイントだけ覚えてあとはその場で話すようにしたのも良かったと思います。
――首都決戦はどうでしたか？
大学に入ってからは、読む本は医学書に偏ってしまっていたんですけど、やはり首都決戦になると全国からいろんな学生が集まってくるので、そこで本の情報交換ができました。また、普段の学生生活のことなども話せて友達が増えました。
――交流会では連絡先も交換されていましたよね？
はい、普段も連絡をとっています。他大学の学生とのつながりができたのが良かったです。その中には、ビブリオバトルの学生連盟を作ろうとがんばっている人もいます。
――それはぜひ実現して欲しいです！では、今回の大会で紹介された『あん』を選んだ理由は何ですか？
『あん』は高校生の時に買ったんですが、その後、インドネシアに短期留学して実際にハンセン病療養所などを見て、ハンセン病に興味を持ちました。『あん』もハンセン病を題材にしているので、それについてみんなにも知ってほしいと思ったのが選んだ理由です。
――図書館は利用していますか？また、普段はどんな本を読みますか？
図書館には、授業などの調べものがあるのでよく来ます。高校生の時は小説を読んでいたんですけど、大学に入ってからは、小説は少なくなりました。一番読んでいたのは中学生の時です。友達に薦められて『ダレン・シャン』(Darren Shan 著、小学館 2001-2005）などを読んでいました。分厚い本を読めた、ということがすごく嬉しかったですね。
――他に、これまでに読んだ本の中で印象深かったものはありますか？
高校の時に読んだ高橋歩さんの本が印象深かったです。旅や人生について書かれた本を読んだことが、国際に興味を持ったきっかけの一つでもあります。
――では、好きな作家は？
好きな作家は江國香織さんです。高校生の時にテストで『デューク』という短編が出てきたんですが、その時に好きだなと思って、『デューク』が入っている短編集（『つめたいよるに』新潮社 1996）を買ったんですけど、今読み返してもやっぱり面白いです。飼っていた犬のデュークが死んじゃって、すごく落ち込んでいる女の子のところにデュークが男の子として現れて、1日デートするっていうお話です。
――おすすめの本がまだまだありそうですね。ビブリオバトルは、またやってみたいですか？
ぜひ、またやってみたいです。
――最後に、ビブリオバトルのおすすめポイントをお願いします！
本を読んで、自分が思ったことを人に伝えるのも醍醐味の一つではあると思うんですけど、ビブリオバトルのスローガンに「本を通して人を知る」とあるように、他の人と話すことで、異なる視点を知ったり、それによって自分の考えも変わってきたりするので、やっぱり、多くの人と出会えるのが一番の魅力だと思います。そこをみんなに知って欲しいです。

読売新聞 西部版 朝刊
2015年12月24日29面（福岡）

全国大学ビブリオバトル

今成さん 準チャンプ

「人生考えさせられる」

新聞でも
紹介されました！

ホームページもみてね！

平成 28 年４月６日　発行

発行者　日本赤十字九州国際看護大学図書館

http://www.jrckicn.ac.jp/cgi-bin/library00.cgi